

Sgy

死神代行裏業務日記

2009 Summer vol.23

BLEACH
FANBOOKS
Ichigo ♥ Rukia

淑女のひそかな愉しみ
『死神代行業務の後に…』

尸魂界のGIMAISTへ贈る

義妹主義。 

滅却師は見た！
『死神代行の押入れ収納術』

巻頭特集☆一護×ルキア

死神代行の裏・ 全て見せます！

R-18
for adult.



死神代行裏業務日記



Special Guest
You Hasegawa



スカートの中身は超ニーハイソックスでした。

こんばんみ。

彩羽スイ(イロハネスイ)と
申します。

今回はらぶらぶな一護×ルキア本です。
そして素敵ゲスト様も有いです。

あにめオーフニング、moeですね。

あのルキアの制服姿です。

あの制服の中身はこう→
なっていると妄想してます。

織姫ちゃんと同じサイズの制服を
着るも胸はフカフカ、ソックスは
超ニーハイソックスに…(ハアハア…)

最大のmoeポイントはシャツが
ペロンと片方だけ出ている所です☆

…HENTAIトーク申し訳

ありません。

ぶいーちさんが何処へ向かって
行っているのか最近よく
分からなくなっている今日この頃
ですが、ルキアたんへの愛はまだまだ
続くと思われれます…ので楽しんで頂けると
幸いです☆☆☆



このシャツがペロッと
出てる所…

moeポイント!!





はあ…っ

「護…」



…!

ずっと
こうして
いたい…

…お前が
そんな事言っ
の
珍しいな…



変か…?



...58...

スゲー
かわい
思った



...12121212...

...お前は
変な事を
言うなあ...



?

びっ
っ...

びっ
っ...



なっ...

...目、
逸らすなよ

ちゅ...
ん...

何だ...
急...
う...



ちゅ...
ん...

ちゅ...
ん...

ちゅ...
ん...

ちゅ...
ん...

ちゅ...
ん...

ちゅ...
ん...

!!







エロいな...
こんなに膨らんで...

うっわ...
丸見え...

うっわ...
丸見え...

...ホラ、
コレ・自分で
入れてみるよ











男ってのは
好きな女に

つい意地悪
したくなっちゃう
モノなんだよ

!



一護...

それって...



んんん...

...その後
二回続けて
中出し。
死神代行の性は
止どまる事を
知らず...
(以下中略)
そんな死神代行を
私は...
嫌いでは無いです。



良く出来たな
朽木!

この内容は
袋とじて
掲載しよう!

いいワケ
ねーだろ!!

はいっ!
隊長・色持
所から血...

ここは黒崎一護の部屋。時刻は夜の九時を過ぎた頃だろうか。食事も風呂も済ませた一護は、明日学校に提出する課題を済ませようと机に向かっていた。

その隣のベッドの上では、彼の押入れに居候している朽木ルキアが楽しそうに何かの本を読んでいる。

「おい！何さっきからゲラゲラ笑ってんだ！課題に集中できないだろうが！少しは静かにしてろよ！」

あまりにもうるさ過ぎて集中できなかった一護が、ルキアに注意をする。

「ふん！貴様の精神修行が足りぬから、周りの音や声が気になるのだ。私が隣で何をしようよと、自分の今やっている事に集中できるくらいの精神力を早く身に付けろ。馬鹿者め！」

という具合にいつも言い返されてしまう。

(あいつには、周りに気を使うという言葉はたぶん無いな) と思ってしまう一護である。

「はいはい、俺の修行が足りないせいですよ。すみませんね！」 ちよっとキレ気味に言ってみた。

「分かればよいのだ。もっと精進しろ。」 いつもの調子で返される。

(まったく腹の立つ奴だな。)

いつもそう思うのだが、こんな言葉のやり取りも、お互い心を許せているような気がして、実は心地よかったりするのである。

普段のルキアは、その可愛らしい見た目とはまったく逆で、俺に対

しては非常に厳しいというか、上から目線で言葉を投げかけてくるので、いつも頭に来るのだが、不思議と許せてしまうのだ。

それはたぶん、ルキアがすごく仲間や家族思いで、精神的にも肉体的にも強く、いざと言う時には体を張ってでも相手を助ける事のできる人だと分かっているから、出会った時から魅了されて続けているのだ。また、戦いの場においても、安心して背中を預けられるのもルキアしかないと思っている。

そんなことを考えていると、ルキアの携帯が鳴った。

「一護、虚が出るぞ！準備しろ！」

ルキアの顔が戦いに出る時のものになる。

この時の彼女はいつも凜としていて美しい。が、見とれている場合ではなく、自分も準備をするべく、代行証を手にとった。

体から抜け出して、コンを入れると、ルキアと共に出発する。

「コン、後は頼んだぞ。行くぜルキア！」

「ネエさくん、行ってらっしゃい。くれぐれもお気を付けて！」

「ああ、行って来る。」

(まったくコンの奴、いつも俺の事は無視しやがって！ちよっとムカつく！今はそんな事を考えてる場合じゃねえな。早く虚の出る地点に急がねえと)

最初に通知のあった地点に辿り着く間、いつになくルキアの携帯はほとんど鳴りっぱなしで、二人して壊れたのかと思う程だった。

いったい今夜はどれだけの虚退治になるのやら、考えただけでもゾツとする。

もうすぐ奴等の出てくる時間だ。

「一護、そろそろだ。」

ルキアが言った数秒後、虚が現れ始めた。

「さあ、今夜もちゃっちゃと片付けますか！」

そうやって、俺の斬魄刀『斬月』を手に、向かって行こうとしたその時、携帯の予告と寸分違わず、次から次へと奴等が現れ始めたのである。

「こりゃあ予告通り凄い数だな。ルキア！卍解してさっさと終わらせるぞ。」

「お前は何故私に命令している。言われずともそのつもりだ！」

「それは失礼致しました！」

そう言いながら俺たちは、虚の群れに向かって行った。

一護の部屋へ二人が戻ってきたのは真夜中三時を過ぎた頃だった。

一護の父も、妹達も、深い寝息をたててぐっすり眠っている。

コンもまた一護の体に入ったままで爆睡していた。

二人は皆を起こさぬよう気をつけながら、一護は自分の体に、ルキアは義骸へと戻っていく。

「しっかし今日は凄い数だったなあ。さすがに力使い過ぎて疲れた。」

「ふん！あれくらいの数で疲れてどうする。今日は雑魚ばかりだったからいいようなものを、もっと強い敵だったらどうするのだ！日頃から体も戦闘技術ももっと鍛えろと言っておるだろうが。」

(また始まったな)

いつも虚退治から帰ると、必ずルキアは説教染みた事を言い出す。

俺が疲れたとかきついかマイナス思考発言をするからなのだが。(がんばった時くらい少しは褒めろつつうの。)

なんて事を思ってしまう。

「はいはい。ルキア様、いつも厳しいお言葉ありがとうございます。」
などとちよつとふて腐れたように言ってしまった。

「ありがたく思っているわりには、なかなか強くならんではないか。まったく成長せん奴だ。だいたい貴様は口で言うばかりで、実際にやっているところなど見たことがないぞ。まったく、有言実行という言葉を知らぬのか？」

自分の事を小馬鹿にしたような言い方をする彼女に対して、少し腹が立ったが、ルキアに口で勝てるわけも無いので、寝る事にした。

「はいはい、まったくもって弱っちい奴でどうもすみませんねえ。こ

れからは精進いたしますので、このへんで休ませていただきます。おやすみい。」

そうやってそそくさとベッドに潜り込んだ。

だが、言い足りないルキアが、はいそうですか、と素直に寝かせてくれる訳はなかった。

「こら！一護！まだ話は終わっておらぬぞ！だいたい私よりも先に寝ようなどとは図々しい奴だ。寝れば逃げられるとも思ったのか、馬鹿者が。考えが浅はかだな。そんなんだからお前は……って！おい！聞いておるのか一護！」

そう言いながらルキアは、掛け布団を引き剥がそうとしているが、一護がしっかりと握っている為なかなかめくる事ができない。

「おい、一護起きろ！話はまだ終わっておらぬぞ！おい！」
ルキアが何度声をかけ、布団を引っ張っても、一護は依然として起きようとしなない。

(ちよっとしつこく言い過ぎたか……)

彼が誰も居ない所で、こっそりと、体が動かなくなる程鍛錬していることをルキアは知っているし、出会った頃に比べたら格段に強くなっている。

学業の方も怠けることなく、常に成績は上位で、見た目からは想像がつかない程真面目な男なのである。

だったら、いつも褒めてやったらいいのでは？と思われるかもしれないのだが、彼は褒めてしまうとすぐに調子に乗るので、心を鬼に

して、いつも厳しい事を言うようにしているのだ。

だが今日は本当に凄い数の虚で、彼は私よりも多くの敵を倒してくれていた。少々やけくそだったようにも見えたが、がんばったことに変わりはない。

(素直に褒めてやればよかったかな。)

少し後悔して、今のこの状況がちよっと辛くなってしまった。

「一護……すまぬ……」

思わず出た一言だった。

「まったくお前はしつこ過ぎんだよ。」

布団の中から一護の声がした。

そして布団から出てきた彼は、まったくしょうがないというような顔をしてこつちを見ている。

「あんな落ち込んだような声で人の名前呼んで、謝ってんじゃねえよ。ほっとけなくなんだろうが。」

そうやって彼はルキアに近づき優しく抱きしめた。

「別に怒ってねえし、お前の説教なんていつもの事だろう。だから気にすんな。」

いつも、言い合いから喧嘩に発展して、最後には、怒っている彼を見て、言い過ぎたかなと、心の中で反省する。

一護は、そんな私を責めることもなく、時間が経つと、いつも通りに接してくれる。それが当たり前のように感じていたのだが、今日は、彼の日頃の努力している姿などを思い浮かべてみたりしたからだろうか、後悔の気持ちがかんぱらんでしまい、凄く哀しくなっ

まったのだ。

「一護、いつもいつも、きつい言葉ばかりを言って、本当にすまない。」
そう言ったルキアの瞳から一筋の涙がこぼれ落ちていく。

「おっ、お前、何泣いてんだよ！俺は怒ってねえって言ってんだろ。」
驚いた一護が慌てて言う。

ルキアの泣く姿など今まで一度も見たことのない彼は、この状況をどうしたものかと、必死で考えていた。

するとルキアがボソボソと話始めた。

「一護、お前はいつも皆の居ない所でちゃんと鍛錬していて、以前とは比べものにならないくらい強くなっている。現世での生活だって、サボることもなく真面目にやっているのに、褒めると調子に乗るからと、わざとお前がへこむようなことばかり言って……。それでもお前はいつも私の事を許してくれる。今日はそれがとても辛くなってしまったのだ。何でお前は許してくれるのかと……」

ルキアは泣きながら今の気持ちを一護に伝えた。

それを聞き終えた一護は無意識に、彼女を包み込むように優しく抱きしめていた。

「お前がわざとそんなことを言ってる事くらい、とつくの昔からお見通しなんだよ。そりゃたまには本気でムカつく時もあるけど、それでも許せてしまうのは、お前が俺の為にしている事だって分かっているし、信頼してるし、お前の事が好きだからに決まってるんだろ。わざわざ言わせんじゃねえよ。」

彼はそう言うと、ルキアにそっとキスをした。

「一護……」

二人は見つめあった。

一護は、ルキアのちよつと困ったような、照れたような顔を見て、どうにも理性を保てなくなってしまうた。

「ルキア！」

彼は思い切り彼女を抱きしめる。

「んっ！」

一護からの、息が出来ない程の激しいキス。

恥ずかしさから、少し躊躇してしまったルキアの口腔内へ無理矢理舌を入れ込む。彼女の舌を探し当てると、彼は貪るようにそれを吸い上げた。

「っん！ んんっ！ ふあ、んっ……っ」

あまりの激しさに唾を飲み込む事が出来ず、口端から流れ落ちる。ルキアの抵抗はすべて消え去り、自身の体を支える事が出来ないくらい力が抜けていく。

彼女の快楽への扉が開かれてしまったのだ。

ルキアは、体全体が熱くなっていくのを感じていた。

今一護が触れている全ての部分に意識が集中する。

下腹部が疼いてたまらない。

(キスだけでこんなになっちゃってしまおうとは)

ほんの少しだけ残っていた理性で、そんな事を思っていたが、この理性が無くなるまで、そんなに時間は掛からなかった。

一護は愛しくてたまらない彼女に、キスだけで満足できる訳もなく、

本能の赴くまま、彼女をベッドへと押し倒す。

「一護、痛っ……んっ！」

突然ベッドに倒されたルキアは少し痛かったのか、声を上げたが、その途中で一護にまたも唇を塞がれてしまった。

欲望を抑え切れなくなった一護は、キスの場所を唇から首筋へと移動させていく。

そして、赤い痕を残しながら鎖骨の辺りに来たところで、彼の手は彼女の上着のボタンを外そうとしていた。

ルキアに覆い被さっていた一護だが、ボタンを外す為体勢を変える。馬乗りになった彼は、興奮していたせいか少し慌てており、すんなりとボタンを外す事が出来ず、イライラしながらも、なんとか全てを外し、服を左右に開いていく。

中には可愛らしいレースの下着が着けられていた。

なんだか、生で見るよりもよほどエロティックでさらに興奮してしまふ。

堪らず、下着の上から、程よく盛り上がっている乳房を触ってしまった。

「あっ……い、一護……やっ、ああ……っ」

少ししか触れていないのに、ルキアはすでに体中が敏感になっていった。

そんな声を聞かされては、男として我慢出来るわけがない。

乳房を隠しているその下着を上まで捲り上げ、程よい形の可愛らしい乳房が露になる。

そして、両の乳房を掴み、激しく揉んでいくその行為に、ルキアは思わず声を上げてしまう。

「あっ、……あ……ふあっ、い、一護……あっ！」

体中が敏感になっている彼女には、その刺激が強すぎて、喘ぎ声が止まらない。

快感のせいで硬く膨れ上がった胸の中心を、指で揉み上げられ、さらには唇で吸い上げられ、彼女の喘ぎ声は激しくなる一方である。

「はっ、あっ……やあ……そこ、だ……め……っ！ ふあ……あ……あ……はあっ……はあっ！」

「そんなに気持ち良いのか？ルキア」

「やあ……もう、だめえ……気持ち良過ぎて、あっ……はあっ！」
先程から、ルキアの硬く閉じられていた両足がモジモジと動いている。

一護自身も限界だったが、ルキアもまた同じであった。

しかし彼は、もう少し、彼女を焦らしてやりたくなり、まずは、ルキアの両足の間に自身の足を挟み込んで隙間をつくる。

そしてスカートを捲り上げ、現れたレースのショーツの上から、中心を撫でてみる。

「こっちはもう限界って感じだな、ルキア。かなり濡れてる。」

「はあ！そこ……触っちゃ……あっん……だめ……いって……しまいそう……だからっ……やあんっ！」

彼はしばらく指で、彼女の中心を撫で回していた。

そして、一旦手を止め、ショーツを引き剥がすと、彼女の両足を左

右に大きく開き、その中心に顔を埋める。

濡れきった中心を押し開き、唇を押し当て、溢れた蜜を吸い上げる。そのたびに、グチュ、ズチュというイヤらしい音が部屋に響き渡る。

「一護！そんなところお……やああ……あ……あんっ……ふあああ！」

ルキアは声を上げるたび、ビクツビクツと体も反応していた。

一護は蜜を吸い上げてしまうと、さらに秘部を押し広げ、肉壁の中へと舌を細く丸め、より深く入り込ませようとする。

「いやあ！ああ……護の……はあ……あ……っ……舌がっ……中で動かさな……はあっ……いつでえ……っ」

一護は、ルキアの声を見無視するかのようになり、深くまで差し込んだ舌を、肉壁を舐め回すように、グリグリと動かす。

その感覚が堪らないのか、ルキアは薄っすらと涙を浮かべていた。そして、彼女の体が大きく反応する。

すると彼女の肉壁がヒクつき、一護の舌を締め付ける。

ルキアは、あまりの刺激に、先に達してしまっただのである。

それに気付いた一護は、舌を抜いた。

「ルキア、もういつちやったのか？そんなに気持ち良かったのか。」

「はあ……はあ……はあ……っ」

彼女は返事も出来ない程になっていた。

その姿は、エロくもあり、妖しくもあった。

一護は、今よりも感じる彼女を見てみたくなった。

「ルキア、このままじゃ終わらない。本当の快楽はまだまだこれからだぜ。」

「！」

そう言って、彼女の乾いてしまった秘部をまた密で溢れさせるために、両足を開き、肉壁の中へと中指を突き立てる。

何度か出し入れするうちに、蜜はその量を増やしていった。

そして、人差し指も加え、二本の指で肉壁を開いていく。

さっきまでの締め付けが解れてきたところで、ずっと張り裂けそうになりながらも我慢していた自身の欲棒を、ルキアの秘部へと押し当てる。

「ルキア、俺、もう限界なんだ……優しくしてやれないと思うから、先に謝っとくぞ。ごめん！」

「えっ！」

一護の欲棒は、溢れている蜜のおかげで、すんなりと勢い良く秘部の中へと入っていく。

ルキアの中の熱を感じながら、最奥まで突き入れる。

「あああああ！」

あまりの衝撃にルキアは一護の腕にしがみ付き、ビクンと大きく体を跳ねさせる。

奥まで入って来た彼の欲棒は、ゆっくりと中の感触を味わうかのように入り口へと戻っていく。

その間も、肉壁はぴったりと一護に絡みつき、快感に思わず達してしまいそうになるのをなんとか我慢する為、一瞬動きを止める。

（気持ち良過ぎてやばい！）

そう思いながらも、今度はゆっくりと抜き差しを繰り返す。

シーツをギュツと握りしめルキアは悶えながら一護に訴える。

しかし、もつと淫らな彼女を見たくなつた一護は、差し込んでいた指を抜き、秘部を激しく突きつけていた欲棒を、窄まりへと押し当てる。両手の親指で穴を広げ、ゆっくりと押し込んでいく。

「痛いっ……！……一護っ……やめてえ……あっ……そんなおつきいの……んっ……入らない！」

「ごめん。でも、たっぷりと解してるから、痛いのは最初だけだ、すこし我慢しててなルキア」

一護は根元まで全て押し込むと、最初はゆっくり馴染ませるように抜き差ししながら、ルキアが痛みを訴えなくなると、スピードを上げていく。

「一護……あ……あっ……気持ち良く……なつて……きたあ……あ……あんっ……もつと……もつと来てえ……あんっ……あ……っ」

ルキアは一護の方へなんとか振り向き、さらなる快感を求めてきた。その言葉は一護の心を最高に煽り

「どうなつても知らねえぞ！」

そう告げると、自身が達するまで、激しくルキアを責め続ける。ルキアは止まることなく声を上げた。

「あっ……あ……はあっ……あんっ……っ……もう……イキそうっ……あ……あ……ふあ……あん……もうイクッ……イクッ……んんんっ……っ」

「うっ、うっ、くっ、俺も……もう……ふうっ……うっ……出る！」
二人はほぼ同時に達したのだった。

一護の精は、ルキアの窄まりの中で、奥まで広がっていき、自分の中で、ドクドクと脈打つのを感じながら、彼女の意識は遠ざかっていった。

「ルキア、優しくしてやれなくてごめんな。俺はお前の事ずっと好きだったから、今日はほんとにうれしかった。ありがとう。」

耳元でささやきながらキスをされるところで目が覚めた。

（……！……確かにさっきまで、一護と交わっていたのに、何故押入れにちゃんと寝ているのだ？……そうだ！最後に私は気を失ってしまったのだった。ということ、私を起こさないように、一護が体をきれいに拭き、きちんと寝間着を着せてくれたという事か。あいつは本当優しいな。）

今の状況を納得して、襦を少しだけ開けてみる。

その先には、いつものように一護がベッドで眠っている。その姿を見ると、さっきまでの事が思い出されて、途端に恥ずかしくなってしまう。そして一護への想いに気づいてしまう。

（私も一護の事がいつの間にか好きになっていたのだな。だから、あ

のような行為をうれいと感じてしまったのだろう。しかし、さっきの言葉は本当に夢の中だったのか？かなり照れくさい言葉だったが……)

夢か現実か定かではなかったが、相当疲れてしまっていたルキアは、また眠りについたのだった。

翌朝、一護の父一心が、彼を起こそうと、ベッドに飛び込んで行ったようだ。だがいつものように、うまく避けられてしまい、部屋から蹴り出されているようだった。

昨夜の事があった為、一護と顔を合わせるの是非常に恥ずかしかったが、ここは年上の威厳を見せなければと思い、普段通り押入れから出て行く。が、やっぱり緊張してしまう。

「一護、おはよう。」

「ああ、おはよう。」

一護は向こうを向いたままで言う。少し見えた横顔は赤くなっているようにも見えた。

「では、先に出るぞ。また後でな。」

そう告げて、窓から出ようとすると、突然腕を掴まれて引き戻された。そのまま抱き締められ、一護の顔が近づいてくる。

「またしような、ルキア。」

そのまま唇に軽くキスされた。

恥ずかしくて、言葉が出せず、頭だけを縦に振った。

急いで窓から飛び出し、心臓がドキドキするのを感じながら学校へ向かった。

(まったく一護のやつ、心臓が壊れてしまわないか！馬鹿者！) 心の中でそう言いながら学校へと急ぐ。

「ルキアのやつ、相当照れてたな。可愛いやつ。まあ俺も恥ずかしくてたまらなかつたけど。でも気まずくならなくて良かった」

ホツとしていると、押入れからコンが出てきた。

「何？ネエさんがどうしたって？」

慌ててコンが周りをキョロキョロ見ている。

「何でもねえよ！じゃあ学校行って来るからな。変な行動するんじゃないぞ！」

「ああっ！何だとてめえ！何にもしねえよ！さっさと学校行きやがれ！ふんっ！」

(相変わらずこいつムカツク！)

こうして今日も一日が始まっていくのだった。

はじめまして 長谷川ユウ と申します！←師匠が名付け親です♡

今回はわたくしの師匠「彩羽スイ様」の御本に、小説を載せて頂く事になり

本当にマジで幸せというか恐縮というか感謝感激でいっぱいであります！

師匠に勧められ、生まれて初めて携んだ小説になります。

言葉の引き出しが乏しすぎる私ですが、振り絞って振り絞ってなんとか完成する事が出来ました。

世のイチルキスト様方に

気に入って頂ける内容になっていければよいのですが・・・かなり不安(汗)

こんなハッピー小説を途中で飽きずに最後まで読んで下さった心優しいあなたへ

心の底から感謝致します！

★ ★
★ Guest
★ Comment.
★

長谷川ユウ様江 ♡

執筆お疲れ様でした～!!

一般人の長谷川さんを巻き込んでスンマソソです…!

しかも名付け親までさせて頂いて…こちらこそ恐縮です…!

初・イチルキ小説頂きました☆ なんいとうツンテシ!!!

萌え死にしそう…(昇天☆)きっついツン、生粋のツン、

略してキツン!!(何言ってるんだ。わたし。)キツンな

ルキアにマメ男な一護。そしてカワイーコンちゃん…

★ なんてツボなイチルキえろ～す小説なんでしょ!!

本当にありがとうございます!!

公私共々今後ともヨロシクお願い致します!!

…長谷川さんはサラリーマン達の癒しです…☆(←?)

* 長谷川ユウ様への感想等は奥付アドレスまでお願い致します☆



月刊

信延靈靜

発行: ぽんちーず(仮)/彩羽スイ

空座町
～出没～

いよいよイマックス!

今、明かされる衝撃の裏事実! 死神代行はお盛ん…



特別付録
死神代行の
素顔…
袋とじ♡

巻頭カラー

好評連載中!

これが
死神代行の一日!

必見!!

楽ではないよ、死神稼業! イチルキ全力応援同人誌!